

目次

『兩足院本毛詩抄』の疑問表現……………山田 潔……………一
——「ぞ・やら・か」の用法——

抄物における「影略互見」について……………坂詰 力治……………元
——用例を中心として——

「中世文語」とは何か……………田和真紀子……………三
——「文語」の二義性と国語学史上の空白——

女中ことば集の系譜（前編）……………松井 利彦……………五
——新出の元禄五年本をめぐって——

近世音韻学における促音挿入形……………肥爪 周二……………七
——『かたこと』『倭語連声集』『漢字三音考』——

漢語の語性……………	今野 真二……………	三
鈴木胤の「心ノ声」……………	小柳 智一……………	二五
——『言語四種論』読解——		
『雅言集覧』における『栄花物語』用例……………	平井 吾門……………	三六
『蜘蛛絲梓弦』の仙台浄瑠璃に関して……………	長崎 靖子……………	三六
上方のオーキニの発生と定着……………	田島 優……………	三六
夢酔独言の動作性謙讓表現 付・オル……………	小松 寿雄……………	三七
江戸時代末期人情本にみられる「です」の待遇価値再考……………	浅川 哲也……………	三九
——人情本の「です」は謙讓語ではない——		
辞書における挿絵の展開……………	木村 一……………	三五
——一九世紀の英和辞書、国語辞書、和英辞書を資料として——		
「遊星」から「惑星」へ……………	米田 達郎……………	三五
——明治時代以降を中心に——		
節用集終焉期の諸相……………	佐藤 貴裕……………	三七
——昭和期点描——		
所謂「さ入れ言葉」の一表現について……………	丸田 博之……………	三九
——「そうだ」が下接する場合——		
授受補助動詞における用法・機能拡張……………	伊藤 博美……………	二〇五
——「ていただく」を中心に——		
昭和前期台湾における国語の「誤用」とその頻度……………	園田 博文……………	一八五
大正14年『読売新聞』記事に見る方言関連の言語意識……………	新野 直哉……………	一六七
漱石作品における「であった」「だった」の様相……………	北澤 尚……………	一四三

『哲学字彙』の見出し語とフェノロサ講義「哲学史」	真田 治子	125
明治期日本語学習書の仮名表記	常盤 智子	103
——『春秋雜誌会話篇』整版本と活版本とを比較して——		
明治初期の口語体啓蒙書における一人称代名詞	近藤明日子	85
——近代の口語体実用文との関係性の検討——		
明治初期語彙の文体差と意味的特徴	田中 牧郎	63
——文化・歴史・風俗・禍福の語彙を例に——		
『改正増補蛮語箋』の「草」部と「木」部について(下)	櫻井 豪人	43
近世後期江戸語における丁寧な言葉遣い	山田 里奈	23
——〈行く・来る〉を例にして——		
近世上方の「ねま(寝間)」について	村上 謙	1

『兩足院本毛詩抄』の疑問表現

——「ぞ・やら・か」の用法——

山

田

潔

一 『玉塵抄』 「ぞ・やら・か」の用法

惟高妙安の講述に係る『玉塵抄』（二五六三年資始）には、疑問の助詞「ぞ・やら・か」（以下、ゾ・ヤラ・カと表記）が夥しく用いられている。全55巻の用例数は、ゾ約800例・ヤラ約3500例・カ約6300例である。そのうち、10巻までの、ゾ189例・ヤラ459例・カ1157例を対象として、それぞれの用法を分析した結果、およそ次のような結論が得られた（詳しくは、拙稿『玉塵抄』の疑問表現―「か・ぞ・やら」の用法―（『國學院雑誌』二〇二一年二月）を参照せられたい。以下前稿と称する）。

まず、疑問の助詞ゾ・ヤラ・カは、疑問詞と呼応する場合と、疑問詞を伴わず単独で用いられる場合とに二分される。疑問詞と呼応する場合にはゾ・ヤラが用いられ、単独の場合にはカ・ヤラが用いられる。すなわち、疑問のゾは疑問詞を承ける場合にのみ用いられ、逆に、文末のカは疑問詞と共起しない。ヤラは両様に用いられる。

「疑問」の表現形式は、「疑い」と「問いかけ」とに分けられる。平安期の疑問の助詞「か」「や」で言えば、「あるかなさか」は「疑い」であり、「ありやなしや」は「問いかけ」である。⁽¹⁾前者「疑い」は「述定（≡対事的モダリティ）」に、後者「問いかけ」は「伝達（≡対人的モダリティ）」に属する。それは、対者（≡対話の相手）を必要とするか否かの相違である。『玉塵抄』の文章について言えば、「述定文」⁽²⁾は地の文（≡講述者の説明）、「伝達文」は会話（対話）文（≡対話の引用）に相当する。以上、二つの観点から、ゾ・ヤラ・カの用法を分析すると、次のように表示される。

疑問詞と呼応	会話文・伝達(問いかけ)	ゾ	地の文・述定(疑い)	ヤラ	地の文・述定(疑い)	カ
単独で用いる	／	／	地の文・述定(疑い)	／	会話文・伝達(問いかけ)	地の文・述定(推定)

右の概要を説明すると、次のように要約できる。

- 一 ゴは疑問詞と呼応し、対話文に多く用いられる。疑問を、「疑い(述定)」と「問いかけ(伝達)」に分けた場合、ゴは「問いかけ」を表わし、対者(≡対話の相手)に何らかの答えを求める機能を有する。
- 二 ヤラは疑問詞と呼応する用法と単独で用いられる用法との両様が認められる。いずれも、地の文に多く用いられる。「問いかけ」を表わすゴと異なり、言語主体の「疑い」を表わし、「問いかけ」にまでは至らない。すなわち、「述定」の範囲内にとどまる。

三 文末のカは疑問詞と共起せず、単独で用いられる。また、対話文・地の文ともに現れる。対話文の場合は、ゴと同様に「問いかけ」を表わす。地の文の場合は、「ト云ウ意(心)カ」という表現形式の多いことが注目される。すなわち、疑問の答えに相当するコトガラを推定して示す用法が特徴的である。

四 疑問詞を伴わず、単独で用いられる場合のヤラとカとの構文上の相違は、①強意の助詞(係助詞)バシはカと呼応することが多く、ヤラは稀である。②カは接続助詞ホドニを伴い、推定の根拠を示すのに対し、ヤラは「ホドニヤラ」のように、ホドニに下接する用例が多く、挿入句(はさみこみ)的に用いられる。

本稿は、右の『玉塵抄』のゴ・ヤラ・カの用法と比較対照する形で、『両足院本毛詩抄』におけるゴ・ヤラ・カの用法の相違・特徴を分析することを目的とする。

『両足院本毛詩抄』⁽³⁾は、清原宣賢(二四七五—一五五〇)の講述に係る抄物で、『玉塵抄』とほぼ同時代(一五三五年頃)に成立した。宣賢による抄物としては、他に『毛詩聴塵』⁽⁴⁾がある。『毛詩聴塵』は宣賢が講義する際に用いた手控抄物であり、文語・文章語的性格が強い。『両足院本毛詩抄』はその聞書抄物である。すなわち、宣賢が享祿四(二五三二)年から天文四(二五三五)年にかけて行った講義を林宗二・林宗和が筆録したものであり、前者に比して口語・口頭語的性格が強い。手控抄物はナリ体、聞書抄物はゾ体であることが著しい違いであるが、文末に限らず、本文の内部においても語彙・語法に相違が見られる(詳細は別稿に譲る)。以下、『両足院本毛詩抄』を『毛詩抄』と略称する。『毛詩抄』は全20巻であるが、それを2巻ずつにまとめて、ゴ・ヤラ・カの使用数の分布を示すと、次のようになる。

ゾ	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	計
ヤラ	7	11	10	4	7	4	10	6	13	7	79
カ	20	28	14	13	20	32	21	15	44	16	223

『玉塵抄』の場合、10巻までの分布は、ゾ189例ヤラ459例カ1157例であったのに対し、『毛詩抄』は、ゾ666例ヤラ79例カ223例であり、分布は著しく異なる。それは両者の文体の相違に関わる。すなわち、『玉塵抄』は中国古典からの引用が多く、抄文も、その引用文の口語訳に類するものが多い。古典本文に対話文が現れば、抄文もそれを承けて、対話形式の表現が用いられる。それゆえに、ゴ・会話文(伝達)ヤラ・地の文(述定)カ・会話文(伝達)地の文(述定)という分類も可能であった。

しかるに、『毛詩抄』の場合は、『毛詩(詩経)』の本文に即しての、清原宣賢の説明が基調となっている。すなわち、『毛詩(詩経)』の本文の語句を抽出し、清原宣賢の解釈を講述したものである。それを地の文と捉えるならば、